

## 令和5年度 2学期始業式 校長あいさつ

令和5年（2023年）8月22日（火）

みなさん、こんにちは。校長の石川です。

夏休みが終わり、いよいよ2学期が始まります。みなさん夏休みはいかがお過ごしでしたか。元気で過ごすことができたでしょうか。夏休み中に行われた各種行事、補習、そして全国総文祭や、各種大会等、皆さんの努力と活躍の様子については多くの先生方よりお話をうかがっています。今年の夏は猛暑日が続き、運動をするのにも、受験勉強を行うにしても暑さとの戦いだったのではないかと思います。私はお盆の期間に年配の方々とお会いをする機会が多いのですが、皆さんが口をそろえておっしゃるのが、「以前は30℃を越えてくる日が続くと、『今年は暑い夏だね』なんて言っていたのが、今では35℃を超えるのが当たり前ですものね」というものです。そんなお話をうかがうたびに、前にも言いましたが、本気で地球環境についてみんなで考えていかなければならないと感じているところです。そんな暑さの中の夏休みでしたが、皆さんはそれぞれの工夫をしながら、今できることを精一杯取り組む夏を過ごしてくれたのではないかと思います。

さて、2学期は合唱コンクールや、全校クラスマッチ、とんぼ祭記念講演といった行事が目白押しです。文化祭も含め、こうした行事が生徒会の委員会や協議会を中心に生徒自身の企画運営によって行われてきたと言うのが、本校の自治たるゆえんとするところだと思います。ところで、とんぼ祭は今年で76回目でしたよね。今年の3年生は深志卒業76回生ですので、深志高校としての卒業年次ととんぼ祭の回数は一致します。では、気になるのが第1回とんぼ祭、すなわち、深志1回生が卒業した昭和23年という年なのですが、この昭和23年はいったいどんな年だったのかというと、言うまでもなく、戦後、新制松本深志高校が始まった年にあたります。しかし、本校の文化祭は、当然のことながら、それ以前の旧制松本中学の時代から行われてきました。旧制松本中学校のことを、同窓生の皆さんは松中と書いて「しょうちゅう」と呼びますので、以下「松中」と呼びます。スライドの絵は、松中が開学したことを受けて行われたお祝いの様子です。当時はお城の外堀の内側に校舎があり、気球が飛んでいたり、天守閣からサーチライトが照らされていたり、盛大なお祝いがされた様子がうかがわれますね。松中のころの文化祭は開校記念日である11月1日に開祭式が行われましたので、文化祭のことを「開校記念祭」略して「記念祭」と呼んでいました。皆さんもご存じのとんぼ祭の3つの歌があります。この3曲は昭和27年(1952年)に発表さ

れたものなのですが、この中に「祝記念祭歌」というのがありますよね。なぜ記念祭というのかわからなかった人たちも多いと思うのですが、松中の時代の文化祭の呼び方だったんですね。ちなみに、この曲は西穂独標の慰霊の際によく歌われるのですが、「この丘の上にうち集い、命の歌を歌わばや」という歌詞と愁いを帯びたメロディーとが慰霊の思いとリンクするのだと想像されます。

しかし、戦争によって、残念ながら松中の記念祭文化は失われて行きます。生徒たちは兵器工場などに勤労働員され、一方農地の開墾や人手不足となった農家で食糧増産の役割を担い、学校で学ぶことのできる時間が限られていました。校舎も松本医学専門校が昭和 19 年より同居し、松本中学の生徒たちが思うように使えない状況となっていきました。

学校生活を謳歌することから切り離されていた生徒たちですので、戦後の民主化の動きの中で、松中文化の復興、文化祭再興の動きはとても大きなうねりとなって押し寄せたようです。記念祭も昭和 21 年には 11 月に再開され、昭和 22 年までにスライドに示した部活動が次々と復活して、学芸部の発表が記念祭の中核となっていきました。

さて、松中最後の年である、昭和 22 年も本校にとってはいろいろな出来事があった年です。文化祭は松中閉校記念祭として 11 月に実施されましたが、何とんでも復活した野球部が初めての甲子園出場を果たした年でもあります。また生徒たちの熱い要望により、12 月には第 1 回の校内合唱コンクールが開催されました。まさに松中ルネッサンスとも呼べるような、文化復興の時代が押し寄せていたんだと思います。ですから、本来ならば、今年の合唱コンクールは第 77 回となるはずなのですが、実際は第 76 回です。1 回とんでいるのですが、その理由について 3 年生の皆さんはお気づきですよ。一昨年行われなかったというのが幻の 1 回ということになるわけです。

そして、昭和 23 年 4 月に新制松本深志高校となります。入学生は全て男子でしたが、上級生には松本高女などの旧制の高等女学校を終了した編入生もいて、実質的な男女共学もスタートします。7 月には新たな生徒自治機関として生徒会が発足し、文化祭も 10 月に創立記念祭として 4 日間にわたり実施されます。ただ、この年が第 1 回のとんぼ祭のはずなのですが、どの資料にもとんぼ祭の文字が見られません。

昭和 24 年は、校章が現在のとんぼの形に決められた年でもあります。同時に自治・自由のスタイルがいよいよ確立していったようです。例えば土曜の午後には女子生徒を交えたコンパが行われ、下校時間が過ぎたのちにも正門南側の桑畑の中で、延々と時間を忘れて歌を歌ったり話をしていたことが、高等女学校から編入した女子生徒の感想として校友に書かれています。また、白熱した生徒大

会は放課後から夜の 7 時過ぎまで続き、校友会費が月額 30 円から 40 円に値上げされたそうです。そしてこの生徒大会では、前年の 10 月に行われるようになった新制高校の文化祭について、もう開校記念日の 11 月に実施していないし、新制高校になったのだから、「記念祭」という名称をあらためよう、という議論が行われました。生徒大会では一時「十月祭」という名称に傾きかけたらしいのですが、「それでは東大の物まねだ」との反論から一転、現在のとんぼ祭という名称となったと記録されています。こうして昭和 24 年の生徒大会で定められた「とんぼ祭」の名称ですが、その後の回数から逆算をすると、この年のとんぼ祭を第 1 回とするのではなく、新制高校となった前年 10 月の開学記念祭をあらためて第 1 回としたのであろうことが想像されます。そして、松中時代の記念祭がどちらかという、当時の寄宿舍の生徒や郷友会を中心としたお祭りのものから、新制高校の自由な雰囲気の中、お祭りの要素に加え、学際的・芸術的な生徒の活動が前面に出たものに大きく変化し、新制高校の「とんぼ祭」は松中時代「記念祭」とは似て非なるものであるという、当時の生徒たちの心意気が当時の「校友」や「深志高校新聞」などの記録の中にも残されています。そして、その思いは今も脈々と伝えられているのではないかと感じるのですが、皆さんいかがでしょうか。

さて、日中はまだまだ暑いですが、朝晩はこれから少しずつ秋の気配を感じるようになると思います。3 年生はいよいよ進路に向けた様々な取り組みが始まっていきます。自分を信じて、しかし先生方の助言をしっかり受けながら、決して楽な道のりではないと思いますが、自分の道を切り開いていきましょう。2 年生は生徒会や部活などにおいて、リーダーとして任される時期となって来ました。そして 1 年生も自分らしさを深志で発揮できるよう、様々な取り組みに積極的に臨んでもらいたいと思います。寒暖差で風邪をひかないよう、そして換気や手洗いなどの感染症対策も引き続きよろしくお願いいたします。